

技術翻訳屋に必要な能力

翻訳を始める前に通った翻訳学校では、技術翻訳に必要な能力が、①原語を正確に理解する能力、②訳語を正確にわかりやすく一義的に書く能力、③調査能力、の3つだと教わった。

翻訳というと、多くの人が英文和訳を連想する。この場合①の原語は英語で、「そうよね、英語がわからないとね」というのが一般的な反応だろう。

しかし②の訳語、すなわち日本語を書く能力というのには、首をひねる人が多い。「日本人なら誰でもできるではないか？」と思うわけだ。しかし、1文が5行ほどの長さになると、「〇〇の場合、□□から分泌された◎◎によって、△△から分泌された××が、☆☆に変化して、■■を増加させる」といった具合に、それぞれの塊（かたまり）を明確にまとめて、読点（とうてん、いわゆる点「、」）で分けて、さらに助詞の「てにをは」をうまく使って塊どうしの関係をはっきりさせないと、何が何やらサッパリわからなくなる。読点と助詞は、長い文をわかりやすくするために役立つ大切な助っ人である。

そして、②の「一義的に書く」とは「1つの意味にしか解釈できない文を書く」という意味で、契約書や機械、医学関連の文書では絶対必要な要素である。しかし実は、中学校の国語の時間でも教えているくらい、基礎レベルの話でもある。

子どもの授業参観に行ったとき、先生が「お母さんはいっしょうけんめいケン君が野球をするのを見ていました」という例を挙げていた。「この『いっしょうけんめい』は、お母さんがいっしょうけんめい見ていたのですか、それともケン君がいっしょうけんめい野球をしていたのですか？」と尋ねると、生徒の答えはまっ2つに分かれた。

先生は続いて「2通りの意味にとれないようにするには、どうしたらいいでしょう？」と尋ね、生徒の意見を聞いて、「お母さんはいっしょうけん



めい、ケン君が野球をするのを見ていました」、「お母さんは、いっしょうけんめいケン君が野球をするのを見ていました」と別々の位置に読点を打ってみせた。これだけで、それぞれの文が一義的になる。読点ってスゴイ。

さらに先生は「いっしょうけんめい」の位置を変えて、「お母さんは、ケン君が野球をするのをいっしょうけんめい見ていました」、「お母さんはケン君がいっしょうけんめい野球をするのを見ていました」としてみせた。これでもっとスッキリ「一義的」になる。先生は『『いっしょうけんめい』がかかる『見ていました』や『野球をする』のすぐ近くに『いっしょうけんめい』を置くと、ハッキリしていいですね」と教えていた。

このすぐ後で、わたしは翻訳学校の講師から「被修飾語のすぐ近くに修飾語を置くこと」と教わった。そーかー、文章の基礎的テクニックはハイレベルな文章でも同じよーに大事なのかー、と妙に感心した覚えがある。たぶん、ハイレベルになっても基礎が大事なのは、スポーツでも芸術でも同じことだろう。

納品前には、訳文を読み返す。心の中で音読しながら、自然に切って読むあたりに読点を打つと、読みやすい。ただし、そこに読点を打っても誤解される可能性がないことを確認してからだ。そして不自然な箇所を見つけ、修正する。場合によっては副詞を形容詞に変えるなんてのも、修正テクニックの1つ。

ここらあたりはまあ、訳者の文章センスの問題で、1つには、それまでどれだけいい文章を読んだか、2つ目には毎回どれだけ丁寧に文章を推敲（すいこう）しているか、が大きいんじゃないかと思う。

わたしは新聞の科学記事だけでなく一面や経済・外交面をマメに読むようにしている。全国紙の記事は、内容に詳しくない素人にも正確に理解できるよう、長い複雑な文章でもキッチリ書いてあるところがさすがである。新聞社では記者が書いた記事がまずければ、デスクと呼ばれる上司が徹底的に修正するらしい。新米記者はそれで鍛えられる、と昔読んだ松本清張だか井上靖だかの小説にあった。今でもデスクなんて言ってるかどうかは、知らないけれど。

③の調査能力については、「DNA シーケンサー」の記事で書いた通りだ。上から下から、右から左から、徹底的に調べることができなければ技術翻訳屋は務まらない。

何年か技術翻訳屋をやっていると、わたしはこの職業が自分の天職ではないかと思うようになった。言葉が好きだというのもあるが、何かが理解できない、というのがわたしには我慢できないのだ。わかりたい、という欲求が強い。だから調査がそれほど苦にならず、わからなかったことがわかると快感。少し前のテレビのクイズ番組で、回答者がまちがっていたらブーッと音が鳴って「モヤモヤ」、正解だとピンポンと鳴って「スッキリ」と画面に出てきていたのと同じ感覚である。

たまにだが、他人様の訳文を読んで、ハハア、コイツ自分でも何を書いているかわからずにただ訳したな、と思うことがある。イヤ、もちろん自分が書いた訳文でも、読み直すと意味がわからないことがあるのだから、大きなことは言えない。翻訳を始めたころは「原文が悪い！」とか「原文がまちがってる！」とか思ったものだが、そのうち、それが大きな誤解だとわかった。訳文が意味不明となるのは、たいていは原文の語や構文の解釈がまちがっているためだ。つまり、訳者の力不足。

ヘイヘイ、もう一度原文をジックリ読み、ひっかかる箇所とその前後を再調査。

根気の要る作業である。しかも重箱の隅をつつくような細かい神経を使わないといけない。

技術翻訳屋は、好きでなければできない職業の1つだと思う。